【あらすじ】

美術とアンティークが好きな小川つぐみ（２２）は、就活で希望通りの企業から内定がもらえず、希望通りの進路に進もうとしている友人の城崎佑希子（２２）を羨んでいた。

つぐみは店の外観がアンティークで素敵だという理由で卒業までの期間働こうと、古本屋のアルバイトの面接を受ける。店主の筒井栄治（２６）に好きな本を聞かれるが、つぐみは本を読まない人間で、あっさり栄治に見抜かれる。

栄治は本を読まない人間に冷たく、つぐみに本を読むように命令し、二人の仲は険悪なものとなる。古本に興味のないつぐみだったが、来客者とのコミュニケーションの中で、徐々に古本屋で働くことの楽しさを理解していき、栄治との心の距離も縮まっていく。

本が好きで古本屋になった栄治を、佑希子と同様につぐみは羨むが、好きなことを仕事にできなくても活躍できる場に出会える可能

性はあること、置かれた場を楽しむことができる性格であることを自覚する。

そんな中、栄治の親が体調を崩したという連絡が入り、栄治が親の反対を押し切って古本屋になったことが発覚する。実家に帰ることを迷う栄治に、つぐみは古本屋も家族もどちらも諦めてほしくないこと、自分も力になりたいことを伝える。

結果的に栄治は一時的に実家に帰ることを選び、古本屋は一時休業状態となるが、栄治は古本屋を諦めず、次の春、以前と同じようにつぐみは栄治の店で手伝いをするのであった。

【登場人物】

小川　つぐみ（２２）　森永大学四年生
筒井　栄治（２６）　まき書店店主
城崎　佑希子（２２）　森永大学四年生
牧野　俊三（７３）　まき書店の常連客
客Ａ～Ｅ
宮代　森永大学教授
配達員

○まき書店（昼）

狭い店内。

客が数人本を物色している。

筒井栄治（２６）、店の奥にあるレジで本を読みながら店番をしている。

レジ替わりにしている机はアンティーク。天板に大きい傷がついている。

栄治、ふと机に目を向け、傷を撫でる。

客Ａ、本をレジに運ぶ。

客Ａ「すみません、お願いします」

栄治、顔をあげる。

栄治「はい」

○森永大学・美術史研究室（昼）

小川つぐみ（２２）、教授・宮代と向き合い座っている。

宮代「小川は、内定は出たのか」

つぐみ「はい、一応」

宮代「じゃあ後は卒論だな、進捗は」

つぐみ「章立てと参考文献のまとめは終わり

ました」

つぐみ、宮代に資料を渡す。

宮代「後はひたすら書くだけだな……」

宮代、手元の資料を見る。

宮代「参考文献。美術建築だと図説が多いから、学校からの持ち運びが大変な時は助手に言ってもらえば手伝うから」

つぐみ「あー……先生。私、アマゾンで買ったんで全部家にもあります、大丈夫です」

宮代「全部？（資料を見せて）ここにあるやつ全部？」

つぐみ「（微笑んで）はい、手元に置いといて眺めたいんで」

宮代「好きだな～」

つぐみ「好きすぎてお財布ピンチですよ」

宮代「卒業まで生き延びてくれよ」

つぐみのスマホ、鳴る。

つぐみ「あ、すみません先生。私ちょっと」

宮代「わかった。次の面談までに一章は完成させておくように」

つぐみ「はい。ごめんなさい、バイトの面接入っちゃって」
宮代、笑う。
宮代「図説買いすぎたツケが早速まわってきてる。どこで働くの」
つぐみ、立ち上がり、ニッと笑う。
つぐみ「めちゃくちゃ素敵な本屋さんで」

○まき書店・前（昼）
アンティーク調で趣のある店先。
つぐみ、窓枠に近づき、まじまじと見つめる。
つぐみ「（うっとりして）素敵」
つぐみ、満足気に店の中に入る。

○同・中
栄治、店の奥のレジで本を読んでいる。
つぐみ（声）「こんにちは、電話させて頂いた小川です」
栄治、顔をあげる。

つぐみ、本棚から顔をのぞかせる。
つぐみ「あ」
つぐみ、栄治に気が付き、軽くお辞儀をする。
栄治、立ち上がる。
栄治「アルバイトの」
つぐみ「はい」
つぐみ、レジ前まで歩く。
栄治「店主の筒井です。筒井栄治」
つぐみ「小川です。小川つぐみ、です」
栄治「小川さん。どうぞ、座って」
栄治、レジ前にある椅子を勧める。
つぐみ「失礼します」
つぐみ、お辞儀をして座る。
栄治、続いて座る。
栄治「早速だけど……小川さんは、なんでうちに」
つぐみ「あ、えっと、ですね……（少し考えて）私、大学で美術史を勉強していて、それでこの書店街の、こちらの本屋さんの建

築や家具が素敵だなって思って……この雰囲気の中で、ぜひともこの雰囲気と一緒に本をお客さんに提供するお仕事をさせて頂きたいなって思って応募しました」

栄治「……」

つぐみ「すみません、なんか日本語変ですね」

栄治「本は」

つぐみ「え」

栄治「好きな本」

つぐみ「本……本はですね（考え込む）あ、星の王子さまが好きです」

栄治「夜間飛行は」

つぐみ「やかん？」

栄治「あと人間の土地」

つぐみ「……？」

栄治「サンデグジュペリ。星の王子さまの作者の別の本」

つぐみ「すみません、存じ上げてございません……」

栄治「最近読んだ本は」

つぐみ「美術史の図説と、スマホで……鬼滅の刃を……」
栄治「典型的な女子大生だな」
栄治、文庫本がたくさん入った段ボールから文庫本を物色し、机に並べ始める。
栄治「これとこれとこれ、あとこっちも」
文庫本、２０冊ほど机に置かれる。
栄治「ここで働きたいなら、これ読んで」
つぐみ「こ！」
つぐみ、立ち上がる。
つぐみ「これって、これのことですか？（文庫本を指さして）」
栄治「これ」
つぐみ「全部？」
栄治「全部。二週間以内で」
つぐみ、立ち尽くす。

○森永大学・食堂（昼）
つぐみ、テーブルに文庫本を積み上げ、

本を読んでいる。
城崎佑希子（２２）、向かい側に座ってラーメンを食べている。
佑希子「で、読んでるんだ」
つぐみ「そう。ありえなくない？　たかがバイトにここまでさせる？」
佑希子「パワハラじゃん。辞めれば」
つぐみ「でもさぁ、他受からないんだよ……（ラーメンを見て）佑希子ちゃん、ラーメン一口ちょうだい」
佑希子「ほらよっ」
佑希子、ラーメンをレンゲに取り、つぐみに食べさせる。
つぐみ「せっかくお店は中も外もアンティークでいい雰囲気なのにオーラ暗いし」
佑希子「好きだね〜アンティーク」
つぐみ「なんか古本って読んでると手がかゆくなってくるし」
つぐみ、自分の手を掻く。
佑希子、積まれた本を手に取る。

佑希子「昔の有名どころと、こっちは……S
F？」
つぐみ「店主さんもさ、威圧感すごいし？
ちょっとかっこいいなって思った私が馬鹿
だったよ」
佑希子「かっこいいって思ったんかい」
つぐみ「ちょっとだけね？　あ～早くバイト
代入らないかな～お金が入ればまだ気も紛
れるよね」
佑希子「ちゃんと卒論もやりなよ？　つぐみ
変なとこ負けず嫌いなところあるから」
つぐみ「うん」
佑希子「私は卒論に就活だよ。年末までに内
定欲しいな」
つぐみ「こないだの面接はどうだったの」
佑希子「ダメ！　ポートフォリオもダメ出し
された」
つぐみ「やっぱ美大じゃないとデザイナーっ
て難しいんだね」
佑希子「ほんと。進路間違えたわ」

佑希子、スマホを取り出し、画面をつぐみに向ける。

佑希子「ねね、この企業どう思う？　ベンチャーで大きい会社ではないんだけど」

スマホの画面に『デザイナーアルバイト募集』の文字とお洒落なオフィスで社員が横一列に並んだ写真。

佑希子「人数少ないほうが即戦力として働けそうだしバイトから経験積むのもいいかなって」

つぐみ「へー……いいと思う。写真かっこいいね、なんかみんな頭良さそう」

佑希子「（スマホの画面を見て）なんでこういう写真って腕組んで横一列に並ぶんだろう」

つぐみ「佑希子ちゃんも並ぶかもよ」

佑希子「確かに。ポーズの練習しておかないと」

○同・廊下

つぐみ、廊下を歩きながら、
つぐみ「アルバイトかぁ……」
と、呟く。
廊下の壁に奨学金制度のポスターが貼ってある。

○まき書店（昼）
つぐみ、店内に入る。
つぐみ「こんにちは」
栄治、本棚の整理をしている。
つぐみ、鞄から文庫本を３冊取り出す。
つぐみ「今日はこれだけ読んできました」
栄治「……ほんとに読んで来たんだ」
つぐみ「は？」
栄治「今までこれ言うと大体辞めたから、アルバイト。えらいえらい（棒読み気味に）」
栄治、文庫本を受け取り、近くの本棚に押し込む。
栄治「店の前ほうきで掃いてきて」
つぐみ「（怒りを抑えながら）……はい」

つぐみ、従業員スペースに向かう。

○同・前

つぐみ、怒りながら少々乱暴にほうきで店先を掃除している。

客B、店の前にやってくる。

客B「すみません」

つぐみ「！　はい、なんでしょう」

客B「ここ、ナボコフの短編集ってありますか？」

つぐみ「え」

客B「絶版してて探してるんです」

つぐみ「ナボ……？　あ、えーっと……ちょっと待ってて下さい」

つぐみ、じりじりと後ずさると、

栄治「ありますよ」

栄治、店から顔をのぞかせる。

客B「（笑顔になって）ほんとですか！」

栄治「はい」

客B、栄治に駆け寄る。

客B「ロリータはどこにでもあるのにこっちは全然見つからないんですよね」
栄治「映画化されましたからね」
客B・栄治、話しながら店に入る。
置いてかれたつぐみ、二人の後姿を見て、
つぐみ「何を言ってるのか全然わからない」
と、立ちすくむ。
牧野俊三（７３）、店の前にやってきて。
俊三「あら、新しい子がバイトで入ってる」
つぐみ「！」
俊三「めずらしいね～栄治君のところで働けてるなんて」
つぐみ「こんにちは……」
俊三「いや～嬉しいな～（自分を指さして）僕、常連ね。俊三。よろしく」
つぐみ「小川つぐみです、よろしくお願いします」
俊三「つぐみちゃん、栄治君はどう？　しご

かれてない？」
つぐみ、店内を覗きこみ、栄治が近くにいないか確認する。
つぐみ「正直厳しいです、キツいです、パワハラで訴えたいです」
俊三、笑う。
俊三「本読みは頑ななところがあるからね。栄治君なんて特にそう。人足りてないのにいつもバイトの子追い出して自分の首絞めちゃって」
つぐみ「いつも追い出してるんですか」
俊三「うん、僕が知ってるだけで３人」
つぐみ「さんにん」
俊三「つぐみちゃんが４人目」
つぐみ「（げんなりした顔で）なんていうか……もっと柔らかいオーラになるべきだと思います。筒井さんもお店も、言っちゃえばこの書店街も……そうすれば色んな人が来るのに」
俊三「ごもっとも。でもね、ここが好きな人

はオーラを求めて来るわけじゃないからねぇ」
つぐみ「？」
俊三「栄治君も不器用さんだけど嫌な子じゃないから、頑張ってね」
つぐみ「……ありがとうございます」
俊三、店に入る。

○同・中（夜）
栄治、レジに座って本に値札を付けている。
つぐみ、従業員スペースから出てくる。
つぐみ「お疲れ様です、次は木曜日ですね」
栄治「木曜もまた掃除だけど」
つぐみ「いいです、お金ないんで。トイレ掃除でもなんでもやりますんで」
栄治「お疲れ様」
つぐみ、レジの机を見る。
つぐみ「この机、かわいいですね、大分年季入ってる……お気に入りなんですか？」

栄治「古本は読まないのに古い机は好きなんだな」

つぐみ「……！（怒りを抑えて）お疲れ様です」

つぐみ、店を出る。

○書店街（夜）

店は既に閉店し、人もいない真っ暗な書店街。

つぐみ、早歩きで歩いている。

つぐみ「嫌な子でしょ」

○つぐみの家（夜）

つぐみ、スマホを取り、検索窓に『ナボコフ短編集』と入力し、検索。画面にいくつか中古ＷＥＢショップが表示される。

つぐみ「ネットで探したほうが早いのに……」

つぐみ、画面をスライドする。

『一緒にやってみよう！接客業のポイ

ント！』と書かれた人材紹介会社の広告が画面に表示される。
つぐみ、広告をクリックする。
つぐみ「（画面を読み上げて）挨拶はきちんとする……声が聞き取りづらいのはダメ……不愛想はご法度。全部真逆じゃん……」
スマホが鳴り、佑希子からの『こないだの企業応募した！』というＬＩＮＥメッセージが受信される。
つぐみ「……」
つぐみ、ＬＩＮＥを開いて『がんばって！』と返信し、スマホを脇に置いて天井を見つめる。
つぐみ「……」
つぐみ、鞄から本を取り出して読み始める。

○まき書店（夕）
店内に二名の客。
栄治、レジに座っている。

つぐみ、本棚をはたきではたきながら
横目で栄治を睨む。
客C、つぐみに近づく。
客C「あのォ」
つぐみ、笑顔になり、
つぐみ「（ハキハキと明るく）いらっしゃいませ！　なんでしょうか」
客C「（大き目の声で）このお店、星の王子さまってありますか？　先生に書店街で探せって言われて」
つぐみ「！　はい、たしかこの辺りに……
（本棚から本を抜き取り）これですね！」
つぐみ、本を客Cに渡す。
つぐみ「星の王子さま、いいですよね！　イラストも可愛くて！　私も好きです！」
客C「あ、訳者がこの人じゃなくて」
つぐみ「え」
客C「なんかァ、授業で訳者別に翻訳がどう違うか比較することになって探してるんですよォ（メモを見て）うん、この人のは持

ってる」
つぐみ「そうなんですか……」
客C「めっちゃ怠くないですか？　もうアマゾンで買おうかな」
つぐみ「確かに……（苦笑い）ちなみにどの方ですか？」
客C「え？　ええっと……（メモを見て）」
客D「あんたら、うるさいんだけど」
つぐみ「！　すみません！」
客D「買う気がないならせめて静かにしてくれよ」
客C、嫌そうな顔をして店を出る。
つぐみ「あっお客様！」
つぐみ、客Cを追おうとするが、栄治に肩を掴まれ止められる。
つぐみ「！」
栄治「あんたの大学では本屋では静かにしろってことも教えてくれないのか」
栄治、客Cを追う。
つぐみ、何も言えずに立ちすくむ。

○同・前（夜）

栄治、客Ｃに本を渡し、お辞儀する。

客Ｃ、本を受け取り、店を後にする。

栄治、店に入る。

○同・中

栄治、店のシャッターを閉め、壁にかかった時計を見る。

時計は七時を指している。

○同・従業員スペース

つぐみ、椅子に座ってぼんやりとしている。

栄治、部屋に入り、ココアを作り始める。

つぐみ、その後ろ姿を見つめる。

栄治「ほら」

栄治、ココアを注いだマグカップをつぐみに渡す。

つぐみ「ありがとうございます……」
つぐみ、マグカップを受け取りココアを飲む。
栄治「泣いてる」
つぐみ、鼻をすする。
つぐみ「泣いてないです、寝てただけです」
栄治「業務怠慢」
つぐみ、ムッとする。
栄治、つぐみの近くの椅子に座る。
栄治「……その」
つぐみ、ココアを飲むのを止める。
栄治「悪かった、泣かせるなんて」
つぐみ「だから泣いてません」
栄治「目が赤い」
つぐみ「寝すぎるとこうなるんです」
つぐみ、立ち上がり、栄治に向かってお辞儀をして、
つぐみ「業務怠慢分の給料は差し引いて下さい。今日はお店でうるさくしてすみませんでした」

つぐみ、文庫本の入ったトートバックを持ち上げる。

つぐみ「あと本、全部読みました。お返しします」

栄治「……（一瞬理解できず）全部？」

つぐみ「（頷く）」

栄治「（トートバッグを指さして）これ？」

つぐみ「はい」

栄治「二週間で良いって」

つぐみ「こういうのは早く済ませたいじゃないですか。それに、読んだら没頭しちゃって」

栄治、トートバッグを受け取る。

栄治「じゃあ……」

つぐみ「全部読んだのでここで働いてもいいんですよね？」

栄治「！」

つぐみ「よろしくお願いします」

栄治「（圧倒されて）はい……」

○同・前

つぐみ・栄治、店の前に立っている。

つぐみ「お疲れ様でした」

栄治「お疲れ」

つぐみ「ココア、おいしかったです」

栄治「それはよかった」

つぐみ「……」

栄治「……」

つぐみ「……（気まずい）」

栄治「……本」

つぐみ「え」

栄治「面白いのあった？」

つぐみ「……正直言ってほとんど難しかったです。読んでて意味わかんない本もありました」

栄治「そっか」

つぐみ「でも……理解したくて……意味わかんない本はネットで解説検索して読みました」

栄治「……」

つぐみ「すみません。本の読み方としてはどうかと思うんですけど」
栄治「……」
つぐみ「……」
つぐみ、気まずさに耐えきれず、軽くお辞儀をして。
つぐみ「じゃあ、帰ります」
歩き出す。
栄治、つぐみの背中に向かって、
栄治「次、文庫整理してもらうから」
つぐみ「（振り向いて）！　はい」
栄治「じゃ」
つぐみ「さようなら」
つぐみ、軽快に歩く。

○まき書店・前（昼）
サラリーマン数名が会話をしながら店の前を通過する。

○同・中

レジに積んである本が雪崩を起こして
床に落ちる。
つぐみ「うわっ」
つぐみ、床に落ちた本を拾う。
栄治、本棚の陰から顔をのぞかせる。
栄治「適当に本棚に突っ込んどいて」
つぐみ、目の前の本棚を見るがミチミ
チに本が詰まっている。
つぐみ「詰まってますよ、本」
栄治「そこ、上のすき間」
つぐみ「ええ〜……」
つぐみ、無理やり本を本棚に詰める。
つぐみ「もう少し見栄え良くしたらどうです
か？　あいうえお順に入れるとか」
栄治「俺が全部どこに何があるか覚えてるか
らいいんだよ」
つぐみ「左様ですか」
つぐみ、ハッと気がつき、
つぐみ「全部覚えてるんですか」
栄治「そうだけど」

つぐみ「これ（周りを見渡して）全部」
栄治「俺が覚えてなかったら客に欲しいもの
　届けられないだろ」
つぐみ「（小声で）すごい……必殺仕事人」
栄治「何か言ったか」
つぐみ「いえ！　筒井さん、すごく本が好き
　なんですね」
栄治「好きじゃなかったらここで働いてない
　って」
つぐみ「確かに」
栄治「誰かさんと違ってな」
つぐみ「（スルーして）このお店はどうやっ
　って開いたんですか」
栄治「前の店主が歳だから譲り受けて。元々
　仲良くさせてもらってたし」
つぐみ「常連さんだったんですね」
栄治「学生の頃からここの通販使ってて、上
　京して店に通うようになって……って感じ」
つぐみ「へえ……ドラマみたい。そんな風に
　仕事に就くこともあるんだ……」

栄治、微笑む。
栄治「俊さん」
つぐみ「トシサン？」
栄治「こないだ来てた人。会っただろ？　あの人から譲ってもらった」
つぐみ「（思い返して）あの人が……」
栄治「いろいろ世話になってるから失礼のないように」
つぐみ「はい」
つぐみ、レジの上の本を持ち上げると机の傷に気がつく。
つぐみ「あ」
つぐみ、傷を撫でる。
つぐみ「傷、大きい」
栄治「もう大分古いから」
つぐみ「このくらいの傷ならアンティーク専用のワックスを塗れば目立たなくなりますよ。うちにあるんで今度持ってきます」
栄治「詳しいんだな」
つぐみ「好きなんで」

つぐみ、レジの上の本を積み直す。
つぐみ「どこ出身の机なんでしょう」
栄治「父親に貰ったから、詳しくは知らない」
つぐみ「イギリスあたりかな……素敵な趣味
してますね」
栄治、傷を撫でる。
配達員、店の入口から顔をのぞかせる。
配達員「すみません、荷物です」
栄治「（入口を見て）はい（つぐみに向かって）ちょっとレジにいて」
つぐみ「はい」
栄治、店の外に出る。
×　×　×
客がいない店内。
つぐみ、暇そうにレジに座っている。
客D、店に入る。
つぐみ、客Dに気がつくが、気まずくて下を向く。
客D、本を物色し、レジに本（われはロボット）を置く。

客Ｄ「これ」
つぐみ「（小声で）はい……」
　つぐみ、渡された本を見る。
つぐみ「あ、これ」
　客Ｄ、怪訝な表情をする。
つぐみ「（ハッとして）すみません、私もこの本を読んだばかりで」
客Ｄ「店員さん、ＳＦ読むのか」
つぐみ「普段は全然……でもこの本、初心者の私でも読みやすくて面白かったです。出てくるロボットもみんな人間みたいで可愛くて」
客Ｄ「ふうん」
　客Ｄ、小銭を机の上に置く。
つぐみ「二百円丁度のお預かりになります」
　つぐみ、本を渡す。
客Ｄ「初心者なら銀河ヒッチハイクガイドとか」
つぐみ「！」
客Ｄ「海底二万里とか」

つぐみ「タイトル、聞いたことあります。今度読んでみます」
客D「ん（頷く）」
客D、店の出口で振り返り、
客D「また来るよ」
と、言って店を出る。
つぐみ「ありがとうございました！」
つぐみ、ペンを手に取り、メモ用紙に「銀河ヒッチハイクガイド・海底二万マイル」と記入するとハッと気がついて。
つぐみ「だから本読めって言ったんだ」

○同・前
栄治、台車で宅配された荷物を運んでいると、店から出てきた客Dを見かける。
栄治「（不安そうに）……」

○同・中

栄治、店に戻る。
栄治「留守番ありがとう」
つぐみ「お疲れ様です！」
栄治「なんかテンション高いけど、何もなかった？」
つぐみ「大丈夫です！　本読んで良かったなって思って」
栄治「？　そう」
つぐみ「本って、今ネットでいくらでも買えるじゃないですか。でも家具と同じで、実際手に取って選んだり人と話すことが楽しいんですね」
栄治、きょとんとしているが、つぐみの言っている言葉の意味に気が付き、微笑む。
×　×　×
栄治・つぐみ、本棚の前に立って。
栄治「ＳＦは大体この辺」
つぐみ「（頷いて）あの、この本ありますか（先ほど書いたメモを見せて）」

栄治「あるある。ちょっと待ってて」
栄治、本を探し始める。
佑希子、店の中に入る。
佑希子「つぐみ」
つぐみ「あれ、佑希子ちゃん」
佑希子「近くまで来たから来ちゃった」
佑希子、栄治に向かってお辞儀する。
佑希子「つぐみの友人の城崎佑希子です、つぐみがお世話になってます」
栄治「店主の筒井です、こちらこそ」
佑希子「ね、つぐみ、内定決まった」
つぐみ「え」
佑希子「デザイナー、こないだ言ってたとこ」
つぐみ「そうなの！　おめでとう」
佑希子「バイトだけどね」
つぐみ「ここお店だし、ちょっと外行こう（栄治の方を見て）筒井さん、すみません、少し休憩入ります」
つぐみ・佑希子、店から出る。
栄治、二人の後姿を見つめる。

○同・前（夜）
　つぐみ・栄治、店の前に立っている。
栄治「今日もお疲れ様」
つぐみ「お疲れ様でした」
栄治「……小川さんは、内定出てるの」
つぐみ「あれ、言ってませんでしたっけ。出てますよ」
栄治「そっか、じゃあ春までか」
つぐみ「はい」
栄治「仕事は？　何するの」
つぐみ「配属はまだ決まってないんですけど、西本商事で働きます」
栄治「おお、商社。おめでとう」
つぐみ「ありがとうございます」
　つぐみ、少し考えて。
つぐみ「……あの」
栄治「？」
つぐみ「筒井さん、筒井さんは好きなことを仕事にして楽しいですか」

○書店街（夜）

店が閉まり、誰もいない書店街。

つぐみ・栄治、並んで歩いている。

つぐみ「興味ないんです、内定先の仕事」

栄治「……」

つぐみ「本当は美術やアンティークに関わる仕事がしたかったんですけど、全然受からなくて」

栄治「もう少し就活続けてもよかったんじゃないの」

つぐみ「……私、奨学金借りてるから、なるべく早く足元固めたくて」

栄治「そっか」

つぐみ「ちゃんと仕事は頑張りますよ、頑張りますけど……バイトからでも好きな仕事に就く友達や、必殺仕事人の筒井さんを見てると、キラキラしてて……羨ましいです」

栄治「キラキラ……」

つぐみ「はい、キラッキラです」

栄治「……」
つぐみ「未練を断ち切りたくて、一度は好きなものの近くで働きたいな、って思って卒業前にアルバイトをしようと思ったんですけどそれも受からなくて。それで筒井さんのお店を受けたんです。本詳しくないのに。ごめんなさい」
×　×　×
つぐみ・栄治、曲がり角に差し掛かる。
つぐみ「じゃあ、私こっちなんで」
つぐみ、立ち去ろうとする。
栄治「……きみがバラのために費やした時間の分だけ、バラはきみにとって大事なんだ」
つぐみ「（足を止めて）なんですか急に」
栄治「好きな本の一節くらい覚えとけよ」
つぐみ「（少し考え込んで）星の王子さまですか？　びっくりした、筒井さんいきなりポエム作り始めたのかと思った」
栄治「勝手に人をポエマーにするな」
つぐみ「星の王子さま……王子さまとバラが

一緒に住んでるけどバラが我儘で嫌になって王子さまは家出しちゃうんですよね」
栄治「そう。その後、一緒に過ごした時間分、置いてきたバラが本当は特別で大切な存在だったと気がつく話」
つぐみ「そうでしたそうでした、そんな話でした」
栄治「……」
つぐみ「……？」
栄治「……」
つぐみ「……で」
栄治「昼間、レジの机の傷について教えてくれたじゃん」
つぐみ「？　はい」
栄治「人生長いから、さっきみたいに、知識を活かせる状況に巡り合うこともあるだろうし。バラが王子にとって大切な存在になったみたいに、好きなことに費やした時間や思いはその人の中で糧になるから、全部断ち切らなくてもいいんじゃないの」

つぐみ「……！　筒井さん……」
　栄治、照れて居心地悪そうにする。
つぐみ「筒井さんっていい人ですね、最初は超超々怖い人だと思ってたのに」
栄治「一言余計」
　つぐみ、笑う。
つぐみ「ありがとうございます、少し元気出ました」
栄治「それならよかった」
つぐみ「私、このバイト始めてよかったです。お疲れ様です」
　つぐみ、立ち去る。

○カフェ（夜）
　栄治、俊三と向き合い座っている。
俊三「じゃあ古本まつりには出店するってことで」
栄治「了解」
俊三「最近はどう？　本の交換会は行けてるの？」

栄治「うん、最近は時間が出来たから」
俊三「つぐみちゃんのお陰だね～感謝感謝。
　卒業しても続けてくれないかな～」
栄治「内定出てるって」
俊三「そっか～土日だけでもと思ったけど新
　入社員じゃ大変か。栄治君も昔はピーピー
　弱音吐いてたもんね」
栄治「俊さん」
　栄治、口に人差し指を近づけ『シー』
　のポーズ。
栄治「俊さん、俺、輝いて見える？」
俊三「何急に。新手のギャグ？」
　俊三、笑う。
俊三「僕から見たら、栄治君もつぐみちゃん
　もピッカピカだよ」

○西本商事（昼）
　内定式。
　新入社員達が椅子に座り、社長の祝辞
　の挨拶を聞いている。

つぐみ、綺麗な姿勢で椅子に座り、社長を見つめている。

○美術館（夕）

入口で待つ佑希子。

内定式帰りのつぐみ、走ってくる。

佑希子、つぐみに気が付く。

佑希子「（手を振って）つぐみ！」

つぐみ「遅れてごめん！」

佑希子「お疲れ」

つぐみ・佑希子、館内に入る。

○同・展示室

つぐみ・佑希子、展示を見ている。

○同・ミュージアムショップ

つぐみ・佑希子、商品を見ている。

つぐみ「内定祝い、何かあげるよ」

佑希子「いいの？　やった！　ありがと～」

佑希子、グッズをいくつか手に取り

迷い始める。
つぐみ、画集を手に取り、
つぐみ「画集ももう少し置いてもらおうかな」
佑希子「バイト先に？」
つぐみ「うん、あんまり美術の本は置いてないんだけど、たまに同じ学部の子が問い合わせてくるんだよね」
佑希子「へえ……」
つぐみ「何か、間口が広がるといいな〜って思って」
佑希子「……つぐみ、最近楽しそうだね」
つぐみ「ええ？　そうかな」
佑希子「そうだよ」
つぐみ、少し考えて、
つぐみ「……そうかも。楽しい」
佑希子「最初はあんなに文句言ってたのに。オーラがどうとか店主がどうとか」
つぐみ「何だろうね、オーラが第一じゃなかったみたい」
佑希子「なにそれ」

つぐみ「大事なのは必殺仕事人」
佑希子「いやわけわからんし」
佑希子・つぐみ、笑う。
佑希子「つぐみはすごいね、自分で仕事のいいところを見つけて、楽しめるように努力して」
つぐみ「私一人で見つけたわけじゃないよ」
佑希子「私はさ、融通が利かないし、嫌なことはすぐ辞めちゃうし、やりたくないことはできないから……」
つぐみ「……」
佑希子「この性格のせいで内定出たのも遅かったし、バイトからスタートだし」
つぐみ「佑希子ちゃん……」
佑希子「（ハッとして）ごめんごめん、なんか陰気くさかった！（キーホルダーを持って）ね、内定祝いこのキーホルダーがいいな」
つぐみ「……好きなことに一直線になれる佑希子ちゃんはすごいよ、私、羨ましかった

もん。ううん、今も羨ましい」
佑希子「そうなの？」
つぐみ「そうだよ」
佑希子「お互いに羨ましがってるじゃん」
つぐみ「ほんとだよ」
つぐみ・佑希子、笑う。
佑希子「なんか、私らもうすぐ社会に出るんだって実感しちゃうね」
つぐみ「既に社会の荒波に呑まれかけてるし」
佑希子「好きなこと、忘れずに生きていきたいな」
つぐみ「うん……」
つぐみ、画集の表紙を撫でる。
つぐみ「忘れないよ」

○まき書店・前（昼）
つぐみ、通勤すると店のシャッターが閉まっていることに気が付く。
つぐみ「あれ」
つぐみ、裏口にまわろうとするが、栄

治・俊三が出てくる。
つぐみ「筒井さん、俊さん」
俊三「つぐみちゃん」
栄治「！　ちょうどよかった、ごめん、今日はバイトなし」
つぐみ「何かあったんですか」
栄治「親が体調崩して」
つぐみ「！」
栄治「ちょっと電話してくるから。またシフトは連絡する」
栄治、その場を立ち去る。
俊三「実家から連絡なんて珍しい」
つぐみ「大丈夫でしょうか」
俊三「栄治君、親御さんとあんまり仲良くないからなぁ」
つぐみ「え、そうなんですか」
俊三「僕も加担した身だけど、いい大学出たのに反対押し切って本屋さんになったから、喧嘩別れにみたいになっちゃってね」
つぐみ「……喧嘩別れ」

俊三「最低限の連絡は取ってるみたいだけど。
就職してからは帰ってないんじゃないかな
……」
つぐみ「……」

○同・従業員スペース
つぐみ、本に値札付けをしている。
栄治、部屋に入ってくる。
栄治「あれ、帰らなかったの」
つぐみ「あ、お帰りなさい。すみません、キリのいいところまでやっちゃおうと思って」
栄治「そう、ありがとう」
つぐみ「筒井さん、親御さんは……」
栄治「大丈夫。心配かけてごめん」
つぐみ「実家、行かなくていいんですか」
栄治「近くに兄弟がいるから、とりあえずは平気」
つぐみ「でも」
栄治「うち家族仲悪いし、下手に帰って店守れないほうが嫌だから。気にしないで」

栄治、パソコンを開いて帳簿を付け始める。

つぐみ「……」

つぐみ、掛ける言葉が見つからず、値札付けを再開する。

× × ×

つぐみ、一息ついてココアを入れようと立ち上がり、ふと栄治を見る。

栄治、帳簿を付け続けていて気が付かない。

つぐみ「……筒井さん」

栄治、顔を上げる。

栄治「……何」

つぐみ「このお店に初めて来たとき、店主さん、お店のこと大事にしてるなって思ったんです。棚の中身はごちゃごちゃだけど、埃はないし、お手入れもされてて」

栄治「それ、褒めてる？」

つぐみ「褒めてます。大事だからこそ時間や手間暇をかけたくなるんだなって思って」

つぐみ、ココアを注いだマグカップを
栄治に渡し、椅子に座る。
つぐみ「レジにしてる机、３回はリペアして
ますよね」
栄治「……替わりがないから」
つぐみ「ニトリで買い替えたほうがお金もか
からないし使いやすいですよ」
栄治「アンティーク好きがそれを言うのか」
つぐみ「実用面では軍配が上がるので……っ
てそうじゃなくて。リペアするほど大事な
んですよね、お父さんから貰った机」
栄治「……」
つぐみ「すみません、他所のご家庭のことに
口出して」
栄治「……いや」
つぐみ「……（気まずい）」
栄治「……父親は、俺がもう一人って感じの
人で」
つぐみ「筒井さんがふたり」
栄治「揉めそうだろ」

つぐみ「返事に困る自虐辞めてください」
栄治「お互い言葉が足りない者同士で、喧嘩別れして、もう3年会ってない」
つぐみ「……」
栄治、ココアを飲む。
栄治「でもこれは俺の問題」
つぐみ「？」
栄治「弱ってる家族を見たら戻る気がなくなるんじゃないか、店を続けていくことを諦めるんじゃないかって」
つぐみ「……」
栄治「……」
つぐみ「戻りますよ」
栄治「！」
つぐみ「筒井さん、そんなに優しいんですもん。ご家族の所に行ったら今度はこの本屋の事が気になって、諦めることなんてできないと思います。お客さんや、俊さんのこと思い出して」
栄治「……」

つぐみ「戻っても、俊さんも力になってくれるでしょうし、私もお手伝いします」
つぐみ、少し考え込んで。
つぐみ「勝手に甘いこと言ってごめんなさい」
つぐみ、鞄から家具用のワックスを取り出す。
つぐみ「これ、この間言ってたワックスです。よかったら使って下さい」
つぐみ、栄治にワックスを渡す。
栄治「……ありがとう」
つぐみ、値札を付けた本を脇に積んで。
つぐみ「ひと段落ついたので今日は帰りますね。何かあったら連絡してください」
つぐみ、エプロンを外し、外へ出る。
栄治、ワックスを見つめる。

○森永大学・正門（昼）
冬。生徒達が登校している。

○同・廊下

美術史研究室のドアに『宮代ゼミ・卒論発表会』と書かれた紙が貼ってある。

○同・美術史研究室

つぐみ、生徒と宮代の前で卒論の発表を行っている。

○同・廊下

つぐみ・宮代、研究室から出てくる。

宮代「なんとか終わってよかったよ」

つぐみ「先生、ありがとうございました」

宮代「後は卒業までたくさん遊んで」

つぐみ「はい。無事、卒業まで生き延びて社会に出られそうです」

つぐみ・宮代、笑う。

宮代「そうだ、前言ってためちゃくちゃ素敵な本屋さんでは今も働いてるの？」

つぐみ「あー……」

宮代「？」

つぐみ「今、お休みしてて」

宮代「あれ、そうなのか、残念。一度行ってみようかと思ってたのに」

つぐみ「再開したら連絡します。めちゃくちゃ素敵な本屋さんなんで。遊びに来てください」

○書店街（昼）

つぐみ、ウィンドウショッピングをしながら、まき書店の方向へ歩く。

○まき書店・前（昼）

つぐみ、店の前にやってくる。

書店のシャッターは閉まっている。

シャッターに『しばらくお休みさせていただきます　まき書店』と書かれた紙が貼ってある。

つぐみ、それを見て立ち去ろうとするが、シャッターのポストにビニール袋が入っていることに気が付く。

つぐみ「？」

つぐみ、ビニール袋を手に取る。
ビニール袋には『バイトさんへ』の文字。
つぐみ、ビニール袋から本を取り出す。
本は星の王子さまの原書。
つぐみ「……！」
つぐみ、慌てて鞄からスマホを取り出し、電話をかける。
栄治（声）「はい」
つぐみ「あ、筒井さん、こんにちは、今大丈夫ですか？」
栄治（声）「平気だけど……」
つぐみ「あの、今、お店に行ったらポストに本があって」
栄治「上手い具合に手に取ったな」
つぐみ「え」
つぐみ、振り向く。
栄治、スマホを持ったまま立っている。
つぐみ「筒井さん！　本物？」
栄治「化けて出たみたいに言うな」

つぐみ「いつ戻ってきたんですか」
栄治「昨日の夜」
つぐみ「連絡してくださいよ」
栄治「またすぐ戻る予定だったから」
つぐみ「これ、（本を掲げて）私にですか」
栄治「他にバイトいないだろ」
　つぐみ、本を抱きしめる。
つぐみ「ありがとうございます、大事にします」
栄治「うん」
つぐみ「元気にしてましたか」
栄治「うん、そっちは」
つぐみ「相変わらずです」
栄治「そう」
つぐみ「……この間はすいませんでした。色々、好き勝手言ってしまって」
栄治「謝らなくていいよ」
つぐみ「……（申し訳なさそうな顔）」
栄治「いつももっと俺に酷い事言ってるだろ。今更だって」

つぐみ「（怪訝そうな顔で）筒井さん、ほんと素直じゃないと言うか、損な性格してますよね」
栄治「生まれつきだからな」
つぐみ「知ってます」
栄治「……」
つぐみ「……」
栄治「今までのバイト、本全然読まない人ばかりでうんざりしててさ」
つぐみ「？」
栄治「小川さんもまたすぐ辞めるって思ってた」
つぐみ「はあ」
栄治「でも本も、この街のこともわかろうとしてくれて。なにより、俺のこの性格によくつき合ってくれたと思ってる……ありがとう」
つぐみ「筒井さん……」
栄治「卒業しても、よかったら店に手伝いに来てほしい」

つぐみ、笑って。

つぐみ「もちろんですよ」

○まき書店・前（昼）

春。書店の前を学生が歩いて行く。

客E、不安そうにメモを片手に書店に入る。

○同・中

客E、店に入ってくる。

つぐみ、本を抱えて店内を歩いている。

栄治、レジで本を読んでいる。

レジには家族写真が入った写真立てが増えている。

つぐみ「筒井さーん、本こっち置いときます」

つぐみが抱えていた本、何冊か崩れ落ちる。

つぐみ「うわ」

栄治「こら、いい加減本粗末に扱うなって」

つぐみ「すみません……」

客E、つぐみの足元に落ちた本を拾い、
客E「どうぞ」
つぐみに本を渡す。
つぐみ「ありがとうございます」
客E「あの、本のことで聞きたい事があるんですけど」
つぐみ「はい、何でしょう」
客E「ごめんなさい、あんまり詳しくはわからないのだけど美術の勉強がしたくて。美術史の本ってあるかしら？」
つぐみ「まかせてください、私、美術は得意なんです」
栄治「絶対に見つけて見せますよ」

【了】